

2011Jパネルデザインコンペティション 審査員コメント

「梶 BOX—知足の家」(実例部門)

- ・ 最優秀賞を得た「梶BOX」は、Jパネルをこれだけ大量に、かつ構造材としても使えば“Jパネル冥利につきる”実例であった。(藤森)
- ・ 柱梁の線材+Jパネルの面材という基本的な構成でつくられた住宅。これをプロトタイプとして、今後、遊び心のあるJパネルの使い方も提案して行って欲しい。(腰原)
- ・ 質と量の関係は、常に問題である。もし質のよい住宅があったとしても、それがただ一軒の孤立した試みに終わってしまえば、全体の質の向上にはほぼ寄与しない。しかしあるレベルの質を持った住宅、それも安定的な質を持ったものが大量に、リーズナブルに供給されたなら、時代は変わる。ショートケーキハウスと呼ばれる厚化粧の規格化住宅とは真逆の指向で、戦後、建築家たちが提案した最小限住宅のデザインのエッセンスをも取り入れ、Jパネルの構造面材を現しにした、この規格化住宅が提案する住宅の質は、低コストであるにも関わらず、スタイリッシュな洗練さを感じられる。(大嶋)
- ・ 現代の住宅に比べると、延べ床面積が80.4㎡は少し狭いと感じるでしょう。が、このような『小さな家』を建てることは(明日の住宅)を思えば一つの選択肢だと感じています。写真からは敷地も十分に広く感じられ、庭と繋がる豊かな暮らしが見えます。ただ、『小さな家』はそれほど広くない敷地だとしても家と庭のバランスを好ましく保ち、自然と一体になる暮らしが可能になるはずで、それにしても、こなれた設計だと思います。軸組みとパネルで造る家の長い経験、構造用合板からJパネルに換えてより地域性を増したこと、そして庭も家と同じように力を入れて生活を創る想いから設計を進化させて来たからでしょう。(植久)
- ・ 国産材の杉構造材とJパネルのみの素材でどこまで美しく、構造的にも表現できるかの最大のアピールとしての梶BOXです。Jパネルの使用枚数も飛びぬけています。(三澤)
- ・ Jパネルの構造材、造作材としての二つの機能を生かし、しかも大量に使用してあるJパネルモデルというふうに思います。自然との一体感を感じさせてくれる住宅ではないでしょうか。(中西)

「Jパネルの螺旋階段」(実例部門)

- ・ 優秀賞の「Jパネルの螺旋階段」は、Jパネルの特性をよく生かした実例と評価された。建築家も大工さんも、そして材料も回り階段を作ることができれば一人前である。(藤森)
- ・ 面材としてのJパネルの提案。折り曲げて広げられたよう表現は、折版構造としての可能性も秘めている。(腰原)
- ・ Jパネルで階段を作るアイデアは、実施部門で数点あったが、デザイン的にも、強度実験を重ねて商品化を目指すという完成度の高さも群を抜いていた。中心の柱を無くして、外周部に建てた柱で階段を支持する方式は、材料の特性に対して構造的に合理性があるのみならず、視覚的に“抜け感”のある木質系材料の持つ軽さを演出している。(大嶋)
- ・ 軽やかで、重力を忘れさせるように存在するモノを創り出すことに挑戦したくなるのは、建築の設計に関わる者たちの一つの夢(癖)であります。完成した階段の写真からは挑戦した努力が実り、段板に乗った途端に身体がスーッと重力を越えて上下に運ばれてゆくような、気持ちの良い不安感もあるモノになった

ように感じています。ただ、ちょっとした不安感を、安心して日常に耐える（普段使いの？）不安感にさせるためには、それなりの担保が必要なことを、この設計者はよく知っている。だから実大試験を行ってデータを採ったのだらうと思えてなりません。何故かというと、常に実験から得られる説明力は、様々な可能性を拡げ、違和感なく夢を実現する方法だと思っているからです。（植久）

- ・ かわいい J パネルがまるで折紙細工のように空中にうかんでいる。ふしぎです。大工技術の最高の仕事です。（三澤）
- ・ J パネルの強度が生かされた作品だと思います。空中に浮いているような、デザイン的にも優れ、思わず見とれてしまいました。（中西）

「瑠雨庵」(実例部門)

- ・ 厚板であるからできる穴あけ。J パネルは、木の塊であるがゆえに自由な形状の穴をあけることができる。切り放しだけでなく、エッジの表現なども今後期待したい。（腰原）
- ・ 壁面と床がほぼ J パネルだけで構成された小さな茶室で、パネルに穿たれたスリットや丸穴を照明や通風、採光に用い、他の素材や枠材のような要素を排除することによって、J パネルが持つ、杉の素材感、存在感が上手に生かされている。（大嶋）
- ・ 柱・梁を建てずに J パネルだけで空間を創り出す場合、悩ましいことが多くなります。特に、この作例のように既存の住宅から割り出された平面形(2m40cm×2m30cm)や天井高(2m40cm)に逃げが目立たず、綺麗に納めるのには設計段階での割付け寸法の調整と納まりの検討が必要です。もちろん現場の精度も要求されるでしょう。写真だけでの判断ですが、この部屋は J パネルを縦使いし、照明をすべて埋め込みにしたことで綺麗な空間に仕上がっていると思っています。また、J パネルだからこそ丸型やスリット状の開口部を自由に開けてもいます。ただ、この自由度を発展させた穴があれば、(例えば、有楽窓の様に光の陰影を創る?)もう少し部屋が柔らかくなったかも知れないとも感じました。（植久）
- ・ J パネルの小さい BOX だとそれ自体で自立できます。軸組とからませないで箱としての自由さがここにあります。ムク板なので、開口部をあけてもそれを枠で囲む必要もなく、シンプルな穴がどこにでもできる、いさぎよさがあります。（三澤）
- ・ J パネルがそれ自体で箱が組める強度のある面材であるという実例と思います。また好きなところに穴を開けてもまったく問題ないのも J パネルの利点、しっかりと J パネルを生かしていただいています。（中西）

「B-BOX」(アイデア部門)

- ・ 線材と組み合わせない面材だけの表現、現在の J パネルの厚みでは限界があるが、今後、こうした用途のためのさらに厚い J パネルの登場を期待したい。（腰原）
- ・ J パネルを耐力壁としたガラスの家(グラス・ハウス)プロジェクト。外壁を四周全面ガラス張りにした住宅は、20世紀の建築界の巨匠ミース・ファン・デル・ローエ設計のファンズワース邸(1950)にさかのぼる。スチールの構造フレームと大判のフロートガラスで構成された建物は、世界中の建築家に強い影響を与えたが、その当時は、とてつもなく高価なしろものだった。21世紀の現在(少なくとも日本においては)、実際、住み易いかとか、構造的にリアリティがあるかとかを抜きにして、J パネル構造のこのグラスハウスは、庶民でも手が届きそうなものになったんだなという感慨を覚えた。（大嶋）
- ・ 原っぱに軽やかで、開放感のある小さな家がある。夢のような世界がここに表現されています。中心から放射状に外の原っぱに広がる空間。こんな家があったら「暮らし」に付着した鬱陶しさが晴れるかもしれないと思わせるような、上手なプレゼンテーションです。だから、この家を実現したい想いが強くなり、だから、

耐力パネルは構造用合板にJパネルを両面張りだと少なくとも厚さは84mmになるだろうから案外重いぞ、Jパネル天井の施工手順はどうする、などとディテールを考え込むのはルール違反でしょうね。(植久)

- ・ J パネルの自立する壁を放射状にすれば、居間からのみえ方すべて外がよく見えます。カベを意識せず、開放的な居住空間がつかれる。かんたんです。このアイデアもう少し構造的に作れば、開放型のJパネルハウスとして販売もできると思います。(三澤)
- ・ 住宅の中心からJパネルと構造用合板を貼り合わせた耐力パネルを放射状に配置する、非常に開放的な空間が生まれるように思います。どの場所からも緑が見え、夢のある居心地のよい住まいになるのではないのでしょうか。(中西)

「すすす」(アイデア部門)

- ・ 密実な木の塊としてではなく、適度に間隔をあけることにより、Jパネルの厚みとリブの間隔が、不思議なボリュームをつくりだしている。(腰原)
- ・ 森を開墾して人が生活の場所を作るがごとく、バーコード状に建てた J パネルのレイヤーをくりぬいて内部空間を作っていくという、構造的には実現性に問題はあるにしても、アイディアコンペならではの魅力的な提案である。建物の中に満ちる光の効果をうまく捕らえた模型写真も秀逸である。(大嶋)
- ・ 450枚のJパネルをクロスさせながら並べて使い、穴を穿って自由に空間を創ればどうなるか。模型から見える空間は、日常では不可視なJパネルの森、光のスリットに満ちているのです。だからこそJパネルの可能性としての一つの在り方を示したとも言えそうですが、主題とは別に、Jパネルの3層になった小口の表情が現れる穿った穴の空間に興味を持ちました。今まで主役になれなかった小口が乱舞する姿が見えるかもしれませんね。小口はJパネルの隠れと魅力だという発見でした。(植久)
- ・ とにかくJパネルをたくさん使ってくれる、メーカーにとっては最高のアイデアです。(中西)

「ハメコミパズルの家」(アイデア部門)

- ・ かみ合わせるという面材の基本的な接合方法によって展開する構造実際には、外部に飛び出してしまう余長の有効活用が課題か。(腰原)
- ・ J パネルを井桁状に組み上げてシェルターをつくる、それも、リストラされた素人のおじさんがたった一人でこつこつと作っていくという付加されたストーリーも審査員の涙を誘った。(大嶋)
- ・ このプレゼンテーションは、主旨説明の文章「長年勤めた会社からリストラされたA氏は住む所も奪われた。A氏は……」にやられました。プランにはベッドは一つだけ、もしかすると家族も離散したのかもしれない。そんなA氏が鋸でJパネルに欠き込みを入れているが、手伝ってくれる友人はいるのだろうか。なぜA氏は家を必要としたのか……。こんなことを想像してしまうほどに、主旨文からは不思議な現実感が見えてくるのです。それに、提案したシステムも根気よく頑張れば、何とか成りそうなものと思える、Jパネルの身近な部品性を現しています。何故このような提案をしたのか、提案者は建築家特有の感性や空間性を強調せず、Jパネルが人と共にある物語を語って、魅せたのだと思っています。(植久)
- ・ リートフェルトかモンドリアンの幾何学抽象の絵画のようです。「木を組む」組子の技を住まいに生かす。構造的にも全体のフレームとして成立しそうな箱です。(私は構造学が全くわかりませんが)X 方向、Y 方向もバランスがとれて組子が特徴的な空間を構成してゆけます。(三澤)
- ・ 本当にパズルのようにJパネルを組んで一人で作っていく。まるでキットハウスのようなプランニングです。すぐにでも出来そうでJパネルの未来を感じさせてくれるアイデアです。(中西)

総評

- ・ Jパネルのコンペは日本初に違いないから、企画の段階では心配だった。これまでどれだけ日本の建築会にその存在が浸み渡っているのだろうか。はたして面白い案は出てくるのか。蓋を開けると、幸い多くの参加があったし、案もさまざまあり、現在、Jパネルに関して展開できるであろうアイデアはおおよそ登場していた。現在、工業化木材の領分は変化の途上にあり、Jパネルが多くの建築に関わる人々に受け容れられ、多方向の未来が開かれることを願って止まない。(藤森)
- ・ 単なる厚板の面材としてのJパネルだけではなく、今後の展開を考えさせられる作品が多く見られた。しかし、現在のJパネルの厚みでは、構造的に困難なものもみられ、今後、もう少し厚いJパネルの登場にも期待したい。(腰原)
- ・ Jパネルという素材は、建材として融通無碍であいまいなどころがある。よく言えば、未知の可能性を秘めているともいえる。今回のコンペでは、実施部門、アイデア部門とも、力作ぞろいで、Jパネルの開発者や、生産者、そして審査員も“想定外”のアイデアに満ちた作品も多く集まり、公開審査も和気藹々と進行的だった。今回のコンペがJパネルの魅力をより多くの人に伝わる起爆剤になることを願う。(大嶋)
- ・ なるほどアイデアや夢はじつに多様だと、設計者は夢追い人なのだと、その湧きだす夢の数は尽きることがないのだと、そして夢は人を惑わせそうだと、会場を巡りながら、夢と現(うつつ)のあいだを行き来しながら、夢の正しい見方を考えざるを得ませんでした。どうも夢の中には魔物がいそうで、この魔物の和らげ方を知らなければ、現も楽しくならないのだろうと。これが悩ましいことでした。(植久)
- ・ Jパネルという構造用面材ではあるが、素地として化粧材としての利用の拡大をねらった今回のコンペ、まだまだ「Jパネル」の認識が少ない中、Jパネルのアイデアなどたくさんいただき、生活空間での可能性をみいだしたのはとても有意義なことでした。(三澤)
- ・ この度はどのくらい集まるか心配するなか沢山の応募を頂き本当にありがとうございました。レングスの代表理事として厚く御礼申し上げます。いろいろな作品を見せていただきました。それぞれに工夫を取り入れ、非常に興味深く、かつ応募いただいた皆様のアイデアというか、住宅というものの空間の捉え方というか、その感性に改めて感心させられました。Jパネルが設計者の皆様のアイデア等をさらに広げさせる建築部材であることを今後も願うばかりです。(中西)